



街路樹

イチョウ(公孫樹)、ユリノキ(百合の木)、モミジバスズカケノキ(紅葉 鈴掛の木)、ケヤキ(欒)、ドウダンツツジ(灯台躑躅)

盛岡森林管理署 森林技術指導官 松尾 亨

日本の街路樹の歴史は、意外に古く平安時代にヤナギ、エンジュ、モモやナシなど、都大路の街道沿いに設けられ、日陰や救荒に役立てたようです。しかし、現代では排ガスやヒートアイランドなど過酷な環境に耐えることが街路樹に求められ、厳しい環境への強い樹種が選ばれています。街でおなじみの5種を紹介します。

イチョウは中国原産で生きてる化石とも言われ、中生代の化石が山口や北海道で出土しています。広葉ですがスギやマツなど針葉樹と同じ裸子植物で長寿な樹木です。街路樹として防火効果が高く、広島では被爆したイチョウが寺への延焼を防ぎ、見事再生しています。ユリノキは呼び名が多くあり、写真のように葉の形を半纏に見立てたハンテンボクや、初夏に咲く花を見立てたチューリップツリーなどと呼ばれます。北米原産で高木になります。モミジバスズカケノキは、イギリスで作られたスズカケノキの交

雑種で、実を鈴に見立てたことが由来。一皮むける樹皮も特徴で、この仲間はプラタナスと呼ばれ親しまれています。次に在来種のケヤキは仙台の定禅寺通りが有名ですが、関東などの冬場の乾燥や粘土質のローム層などにも耐えうる樹種です。木目が美しく不朽に強く、城や寺社仏閣の建築に用いられ、伊達藩では殿様御用達の木材で民間人の使用を制限していたほど高級材です。最後に低木ながら街路樹の一員としてしっかり個性が光るドウダンツツジは、蛇紋岩など痩せ地にも耐え、満天星とも言われる花と、紅葉の美しさが魅力です。由来は灯台の脚に見立てたこと。

年末にかけてイルミネーションやライトアップで賑わう街は、私たちを楽しませてくれますが、樹木にとっては夜の明るさや熱によるダメージは災難。ゆっくり休めるのは年明けですかね！



イチョウと銀杏



モミジバスズカケノキ実と樹皮



ドウダンツツジ花と紅葉



ケヤキ並木と葉一緒に飛ぶ種子



ユリノキ葉と実